形態素による丁寧度の分析[1]

堀　素子

I　研究の枠組み

1.　敬語の用法から丁寧さの度合へ

国語学では伝統的に，敬語はどのように使われて来たか，どのような使い方が正しいか，という点が主として論じられて来たように思われる。最近社会言語学的な視点から多くの試みがなされて，用法だけでなく敬語そのもの，あるいは敬意表現として文全体の丁寧さをも考慮に入れようという研究が発表されているが，本研究も大きく分ければその流れの一つに入るものである。[2]

ただ，敬語あるいは敬意表現は非常に複雑な構造をしているので，仮りにAとBという表現を比べてどちらがどれくらい丁寧かといっても一口にはいえない場合が多い。それは敬意の表わし方が各表現によって異なっているので，単純な比較はできないからであろう。しかしながらこの程度の差異はごく小さなもので，巨視的に眺めた場合，日本語の敬語は非常に規則的で明確な配列をなしていて，例えば英語のような西欧語の敬意表現と比べた時，その整然とした姿には美しささえ感じられる。

2.　西欧語との比較

(1)　他者との関係 *vs* 自分の行為

日本語の敬語はすべて他者との関係を基本として成り立っている。敬意を表わすべき相手か否か，敬意をもって語るべき話題か否かが，敬語使用の中心をなす概念で，その外側に場面とか同席する人物とかへの配慮が払われることになる。

英語の敬意表現はこれとは全くちがって，話し手が聞き手である相手にどのような行為を行うかが敬意表現を決定する中心概念である。つまり相手にとって負担となること，相手の領域を侵害するようなこと，相手が好ましく思わないかもしれないようなこと(これを Face-Threatening-Act, FTA と名づけている[3])を行う時にのみ敬意表現が現われるのであって，そのような行為を行わない時には敬意表現は現われない。否，彼らが敬意とか丁寧とかということを考える時に

は，上のようなことが大前提となっているので，ＦＴＡを行わない時の敬意表現など，全く想像もしないのではないかと思われる。もちろんここでいう意味は日常生活のレベルであって，公的な場とか儀式とかでは場の formality を上げるための種々の表現というものはある。が，それは特定の個人を相手として発せられるものではない。

英語話者のこのような無意識の前提を証拠づけるものとして，英語話者による丁寧表現の研究はみな申しあわせたように，何らかの行為を行うという枠をまず設定してから，その中でどの程度の丁寧表現が現われるかを測っている。(4)

(2) 形態素レベル *vs* 非形態素レベル

日本語では聞き手だけでなく動作を行う人物，話される話題，それらの間の関係に対する敬意を表わす方法は，それぞれ微妙に異なっていて，多くの場合それらを取りちがえると表現される意味内容が逆になることすらある。

英語では聞き手に対する敬意を表わすのが敬意表現のすべてといってもよく，第三者が動作を行う場合の敬意表現は，語彙の選択とか文型にわずかにある他は，特別の場合として王室関係者に言及する時に，His／Her Majesty／Excellency／Highness 等の語が使われるのみである。

最も簡単に敬意を表わす方法は，相手の名前に敬称をつける，称号，役職等のある相手にはそれをつける，それらが不明な時は文末に sir，ma'am をつける，というのが一般的な法則である。フランス語，ドイツ語では一人の相手を複数の代名詞で呼ぶことによって敬意を表わすことができる。

次に，語調，抑揚，速度等，文以外の paralinguistic な要素でもって敬意の有無を表わすが，これは日本語でも同じである。

第三に，文全体の構造を変えることによって敬意を表わす，あるいは丁寧度を高めることができる。例えば命令文の代りに疑問文を，直説法の代りに仮定法を使うなどは最もよく使われる方法である。このような現象は日本語にも見られる。

この他に，依頼する時に please を付けるとか，未知の人に話しかける時に excuse me を付けるとかも，文の丁寧度を上げるのに一役買っている。

これらはいずれも文を構成する要素，形態素レベルの問題ではなく，文構造が完結したのちの，その外延の問題である。

日本語の場合はそれとは全く逆に，聞き手に敬意を表わすか否かを先に決めなければ，文を完結することができない。例えば，今日はいい天気である，という意味のことを言いたい時，相手をどう待遇するかという決定が発話の前にされないと，文は途中で続かなくなる。「今日はいいお天気ね」というのと，「今日はいいお天気ですね」というのとは，たった一つのデスという助動詞（つまり形態素）があるかないのかのちがいすぎないが，それの与える相手への影響は大変に大きい。

あるいは，明日学校へ行くか，という意味の質問をしたい時，「明日，学校へ行く？」というのと，「明日，学校へ行かれますか？」というのとは，レルという助動詞の一部レ（これも形態素）と，マスという助動詞（形態素），それにカという疑問の助詞（形態素）という三つの形態素が付加していることによって，敬意の表わし方，丁寧度の点で大きな差があり，場合によってはこれだけで，誰に話しかけているかがすぐにわかることもある。

このように日本語では形態素のレベルで敬意の有無が決定されるのに反して，西欧語にはそのような形態素が存在しないことは彼我の言語間の大きなちがいである。

(3)　西欧語中心の politeness 論争

以上述べたように，英語等の西欧語は呼称，語調のような文の構成要素以外のものを使うか，あるいは文そのものの構文を変えるかの二つの方法によって敬意を表わすが，これらは日本語でも全く同様に使われるので何ら特記すべきことではない。むしろ，日本語の中に大きな場を占める敬語，形態素の付加によって自由に変化させうる敬語というものが，西欧語の中に存在しないことをこそ問題としなければならない。

西欧語のいわゆる politeness 論争に欠けているのもまさにこの点で，彼らの議論は tu / vous の選択と一方から他方への移行，呼称・敬称の選択とその範囲，語調・音省略・音変化等の発音上の変異に集中している。特に発音上の変異に多くの研究があるのは，社会言語学が方言学を母胎として出発したこと，英語の方言は主として発音の差異に表われることを考えれば自然の成りゆきかと思われるが，日本語ならば当然と思われる語彙の選択についての研究はほとんどない。

また，文全体の丁寧度を問題にする場合には，第三者を judge として点数で判定させる方法をとる。もちろん各 judge によって丁寧度はさまざまに判定されるので，その平均値をそれぞれの文の丁寧度とする。この場合にも文そのものだけでは判定できないので，他の多くの周辺情況を組み入れてようやく点数が出せるといった感じである。

このように，西欧語の politeness 論争は，その標的の狭さからいっても問題が周辺的であることからいっても，到底言語学の主たる論争点とはなりにくい性質を持っている。そのために敬意表現は常に文法議論の外に置かれ，「同じことを別のことばで言い換える」変異形（variation）として扱われて来た。従ってその変異形を規定する要素，対人関係とか話題・場面等に対する話し手の態度とかといったものは，文法事項を規定する要素とは見なされていない。

これはちょうど，日本語で人称とか数とかが文法事項を規定する要素と見なされないのと同様である。日本語の動詞の形を決定するのに，主語の人称や数のことをチラとでも考えたことのある日本人がいるだろうか。同様のことが西欧語を母語とする言語学者にもあって，敬意表現を文法事項として取り扱おうとする気配はチラとも伺えない。この事実そのものが言語の相対性を示唆しているのかもしれないが，このことについてはここではこれ以上言及しない。

残念なことに日本の言語学者，特に生成文法家は，このように，文法事項の規定には言語差に

よる大きな溝があることを無視して，日本語を英語と同じやり方で分析しようとしているようだ。しかしこれまで述べたように，日本語には敬語という文法要素が存在し，それを規定するのは敬意の有無ということであってみれば，当然，その敬意の有無と言語表現とを結びつける理論がなくてはならない。

これまでの国語学の敬語研究は，この敬意の所在と言語表現を結びつけるというところに多くの努力が払われて来て，個々の文献における用法，歴史的変遷，他の文法要素との結合のしかた，等については優れた研究が数多くなされている。しかしそれらはほとんど，日本語という一言語の中で完結してしまっていて，他の言語と同じ土俵で比較できるような形では提示されていない。日本語も人間の話す言語の一つである以上，他言語と共通する点もあれば異なる点もあろう。たまたま，敬語は異なる点の最たるものと思われるので，この事象の分析処理の方法如何によっては，日本語と他言語（特に西欧語）との差異と共通点がより明瞭に浮び出るのではなかろうか。同時に，西欧語に全く欠けた視点からの分析・考察を提示することによって，言語一般に対する認識をより深いものにし，言語の研究に一つの寄与をすることにもなろう。

次章では，日本語の動詞の構成と，英語・フランス語の動詞の変化とを比較し，言語間に横たわる基本的な視点のちがいの具体例を見ることにする。

II　動詞表現の構成

1.　敬意の有無 *vs* 人称・数

日本語の敬語は文のいろいろな箇所に現われ得るが，文法的に見て最も基本であり，敬意表現の根幹をなすと思われるのは動詞表現であろう。ここで動詞表現というのは，動詞とそれに付加する助動詞，場合によっては終動詞をも含む。第１章の２の(2)で少し触れたように，デス・マスのいずれかを付ければ聞き手に敬意を表わすことになり，動詞にレル・ラレルあるいはオ～ニナルを付けるとその動作を行う人物に敬意を表わすことになる。動詞によってはこの他に別の表現をいくつか持っているものもある。もっとも，デス・マスが本当に敬意を表わすかどうかには疑問があり，それはそれでまた別の問題として捉えることができる。しかし，デス・マスの付いたものと付かないものを比べた場合，付いたものの方に敬意があるということは疑い得ない。[5]

これらの助動詞は純然たる形態素であり，文の構成要素である。それを付加するか否かは，話し手と聞き手と動作を行う人間との関係にかかっている。それはちょうど西欧語の人称・数による動詞の変化に匹敵しよう。[6] 試みに英語とフランス語との対比で話し手・聞き手・動作主の関係がどのように表わされるかを表示してみる。

(1)　イク，to go，aller の比較

表１では横に人称と数，縦に敬意の有無をとり，日本語，英語，フランス語をそれぞれ別に

表1　日本語と英語・フランス語の動詞の比較

文主語の人称・数	一人称		二人称		三人称	
	単数	複数	単数	複数	単数	複数
	日本語					
A（−） H（−）	イク	イク	イク	イク	イク	イク
A（−） H（＋）	イキマス マイリマス	イキマス マイリマス	？イキマス	？イキマス	イキマス	イキマス
A（＋） H（−）	——	——	？イカレル ？イラッシャル ？オイデニナル	？イカレル ？イラッシャル ？オイデニナル	イカレル イラッシャル オイデニナル	イカレル イラッシャル オイデニナル
A（＋） H（＋）	——	——	イカレマス イラッシャイマス オイデニナリマス	イカレマス イラッシャイマス オイデニナリマス	イカレマス イラッシャイマス オイデニナリマス	イカレマス イラッシャイマス オイデニナリマス
	英語					
A（−） H（−）	go	go	go	go	goes	go
A（−） H（＋）	go	go	go	go	goes	go
A（＋） H（−）	go	go	go	go	goes	go
A（＋） H（＋）	go	go	go	go	goes	go
	フランス語					
A（−） H（−）	vais	allons	vas	allez	va	vont
A（−） H（＋）	vais	allons	——	allez	va	vont
A（＋） H（−）	vais	allons	——	allez	va	vont
A（＋） H（＋）	vais	allons	——	allez	va	vont

注　1.　A＝動作をする人，常に文の主語。H＝聞き手，常に二人称。話し手は常に一人称。文の主語が一人称の時，Aは話し手であり，二人称の時Aは聞き手Hであり，三人称の時Aは第三者である。

2.　（＋）＝話し手がA又はHに敬意を表わしている。（−）＝敬意を表わさない。
例：A(＋)，H(−)＝アノカタがイカレル

3.　？＝慣用的に使われるが，文法的に正しいかどうか不明。

記した。例に使った動詞は日本語イク，英語 to go，フランス語 aller である。時制はすべて現在とした。日本語には表に記したもの以外にもたくさんあるが，代表的なもののみとした。日本語では一人称，つまり話し手が動作主の時，動作主に敬意を表わす（記号で A（＋）と表わす）ということはふつう有り得ないので，一人称の A（＋）の欄は空欄とした。また二人称，つまり聞き手が動作主の時，A（－）（動作主に非敬意）で H（＋）（聞き手に敬意）も，その逆の A（＋）で H（－）も共に敬意のあり方としては矛盾するので，その欄の動詞表現は？を付してある。またフランス語では，二人称，つまり聞き手に敬意を表わす時は，複数形を用いるので，二人称単数でA又はHが（＋）の欄は空欄とした。

まず日本語を見ると，横列にはすべて同じ表現が並んでいるが，縦列にはそれぞれの枠に異なった表現が出ている。すなわち，聞き手への敬意 H（＋）は，①マスの付加，②話し手を下げるマイルの採用の二つの方法で表わされる。動作主への敬意 A（＋）は，①レル・ラレルの付加，②オ～ニナルの付加，③イラッシャル等別の変異形の採用によって表わされる。この時，動作主，すなわち文の主語の人称・数には一切注意を払わなくてよい。ただ話し手自身の敬意をどこに表わすべきかに注意しさえすればよい。

これに反して西欧語，特にフランス語は縦列，つまり同じ人称・数に同じ動詞が並び，横列のちがった人称・数にはちがった動詞が並んでいる。英語でもフランス語でも，動作主や聞き手への敬意の有無で動詞の形が変わるということはない。

こうしてみると，西欧語は主語，すなわち動作を行う人間を中心として動詞の形態が決定されるのに対して，日本語では話し手が，他の人物に敬意を表わすか否かによって動詞の形態が決定されることがわかる。これを，西欧対日本の文化の特徴とされる自律的対他律的，自己中心型対他人志向型，といった対比の一つの現われと見ることもできようが，それはまた別の機会に論じてみたい。

(2) ヤル・モラウ，to give，donner の比較

表１では動詞イクを例にとったが，それよりも複雑な授受動詞を例にとって，他言語との比較をしてみる。この類の動詞には，話し手と聞き手と動作を行う人，すなわち物を与える側と物を受け取る側の４人の人間が関わりを持ち，その上文の主語には与える側でも受けとる側でもどちらでもなれる，という複雑なしくみになっている。これらの関係とそれを表わす動詞表現を表２にまとめてみた。

表１と同様，横に人称，縦に敬意の有無をとっているが，授受動詞の場合は主語だけでなく目的語（与格）の人称も必要なのでそれも記してある。また，物の移動が，主語から目的語の方へなのか（例えば，ワタシがオマエに×をヤル），あるいは目的語から主語の方へなのか（例えば，ワタシがオマエに×をモラウ）によって，現われる動詞が異なるので，その移動の方向を矢印で示してある。(7)

表2　敬意の所在と授受の動詞表現

文主語の人称		一人称		二人称		三人称		
文目的語の人称		二人称	三人称	一人称	三人称	一人称	二人称	三人称
A(−)	S→O	ヤル	ヤル	クレル	ヤル	クレル	クレル	ヤル
R(−)	S←O	モラウ	モラウ	モラウ	モラウ	モラウ	モラウ	モラウ
A(−)	S→O	サシアゲル	サシアゲル	——	サシアゲル	——	サシアゲル	サシアゲル
R(+)	S←O	——	——	——	モラワレル オモライニナル	——	モラワレル オモライニナル	モラワレル オモライニナル
A(+) R(−)	S→O S←O	—— イタダク	—— イタダク	クダサル ——	オヤリニナル イタダク	クダサル ——	クダサル イタダク	オヤリニナル イタダク
A(+)	S→O	——	——	——	アゲラレル オアゲニナル サシアゲラレル	——	アゲラレル オアゲニナル サシアゲラレル	アゲラレル オアゲニナル サシアゲラレル
R(+)	S←O	——	——	——	モラワレル オモライニナル イタダカレル	——	モラワレル オモライニナル イタダカレル	モラワレル オモライニナル イタダカレル

注　1.　上の表は，聞き手に対する話し手の態度が丁寧でない場合のみを記している。聞き手に対して丁寧な場合は，上の表の各表現の末尾がマス又はデスとなる。

2.　S＝文の主語，O＝文の目的語，A＝動作を行う人，R＝動作を受ける人，→＝物の移動の方向

例：［S→O］＝文の主語が動作を行い，物が文の目的語の方へ移動する。
すなわち，S＝Aで，O＝Rとなる。例文：ワタシがオマエにヤル，アナタがワタシにクダサル

［S←O］＝文の目的語が動作を行い，物が主語の方へ移動する。
すなわち，O＝Aで，S＝Rとなる。例文：ワタシがオマエにモラウ，オマエがアノカタにイタダク

3.　(+)＝話し手が敬意を表わしている。(−)＝話し手が敬意を表わしていない。

例：［A(+)／R(−)］＝話し手は動作を行う人に敬意を表わし，動作を受ける人には敬意を表わさない。
Sが二人称，Oが三人称の場合，S→Oならば，アナタがアイツにオヤリニナルとなり，S←Oならば，オマエがアノカタにイタダクとなる。

また，表１では敬意を表わす対象としては動作主Ａと聞き手Ｈのみでよかったが，表２の場合は被動作主である受け取り手をも考慮に入れなければならない。全部を表に納めることはかえって煩雑になるので，ここでは聞き手への敬意すなわち丁寧な態度がない場合だけにした。聞き手に対して丁寧な態度を示す場合は，表２の各表現の末尾をデス・マスにすればよい。ここでも話し手は常に一人称とする。

表２は表１と比べると複雑に見えるが，それは物の移動を与える側から見るか受けとる側から見るかという，視点の移動によって異なった動詞が使われるからであって，敬意の有無という点だけから見れば，表１と何ら変わりはない。

すなわち，ヤル，クレル，モラウは，動詞は異なるが，話し手の敬意が全く含まれないという点では同じＡ(－)，Ｒ(－)の欄に入る。サシアゲル，モラワレル，オモライニナルは，受け取り手に対する敬意があるという点で同じＡ(－)，Ｒ(＋)の欄に入る。以下同様に，動作主Ａと被動作主Ｒへの話し手の敬意の有無によって，表１のイクと同様，四つのグループに分かれる。

ただ，これらの授受動詞は，敬意表現の選択より以前に，物の移動をどの視点から眺めるかを決定しなければならない。その結果，動詞が選ばれ，次に敬意表現を選択するか否かが決定されることになる。

今，ごく簡単にそれを順列化してみると，ほぼ，次のように記すことができると思われる。

1. 視点が受け取る側にある時は，Ｓ＝Ｒ（主語は受け取り手）であり，動詞はすべてモラウとなる。
2. 視点が与える側にある時は，Ｓ＝Ａ（主語は動作主）であり，次の２つの場合がある。
   ① Ｒ＝１Ｐ（一人称）又は２Ｐ（二人称）で，Ｓ＝１Ｐでないならば，動詞はクレル
   ② ①以外の時は，動詞はヤル

この３つの動詞を基本として，受け取り手への敬意の有無，与える側への敬意の有無によっていくつかの異なった動詞表現が選ばれることになる。その一連の選択過程を図１のような模式図に表わしてみる。

図１では，第１段階では主語が動作主か否か，主語が動作主の場合は被動作主の人称は何かを決定する。第２段階では主語の人称を決定する。その結果，表出される動詞が決まる。次に第３段階として被動作主への敬意の有無を決定する。第４段階では動作主への敬意の有無を決定する。その結果，表出される動詞表現が決まる。図には示してないが，聞き手への敬意の有無はこの次の第５段階で決定され，敬意が有る場合にはデス，マスの付いた形となり，敬意が無い場合には直前の動詞表現に戻ることになる。

同じ作業を英語の to give とフランス語の donner で行なったのが表３で，フランス語の場合を模式化したのが図２である。

表3　英語・フランス語の授与動詞表現と目的語

目的語＼主語		一人称		二人称		三人称	
		単数	複数	単数	複数	単数	複数
英語							
一人称	単数	—	—	give me	give me	gives me	give me
	複数	—	—	give us	give us	gives us	give us
二人称	単数	give you	give you	—	—	gives you	give you
	複数	give you	give you	—	—	gives you	give you
三人称	単数	give him	give him	give him	give him	gives him	give him
	複数	give them	give them	give them	give them	gives them	give them
フランス語							
一人称	単数	—	—	me donnes	me donnez	me donne	me donnent
	複数	—	—	nous donnes	nous donnez	nous donne	nous donnent
二人称	単数	te donne	te donnons	—	—	te donne	te donnent
	複数	vous donne	vous donnons	—	—	vous donne	vous donnent
三人称	単数	lui donne	lui donnons	lui donnes	lui donnons	lui donne	lui donnent
	複数	leur donne	leur donnons	leur donnes	leur donnons	leur donne	leur donnent

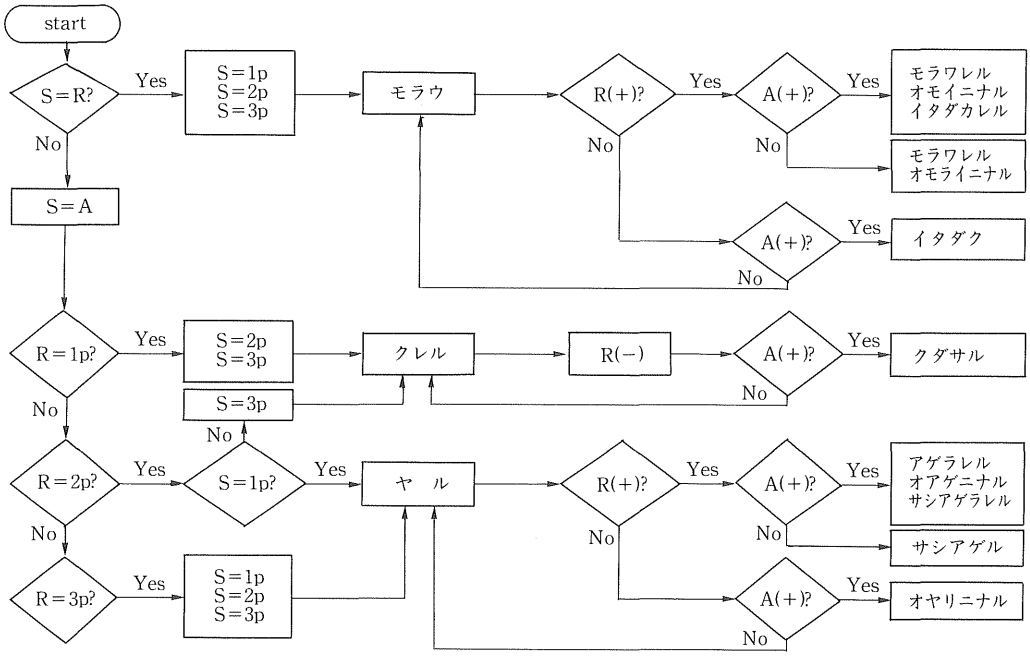

図1　日本語の授受動詞表現表出の過程

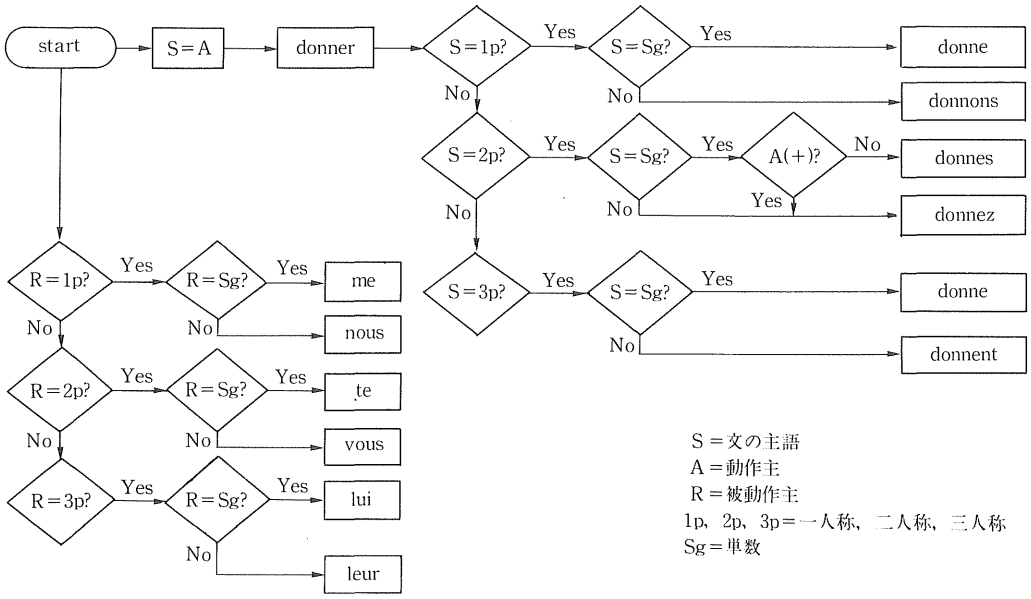

図2　フランス語のdonnerと代名詞(間接補語)の変化の過程

この図２を図１と比べると，次のようなちがいがあることがわかる。

① 被動作主Ｒが動詞と切りはなされている。

② 主語Ｓの単数か複数かが問題となる。

③ 敬意の表明は，二人称複数によってなされるのみである。

④ この図２では省いてあるが，主語が代名詞の時，主語の性が問題となる。

すなわち，動詞表現を決定する各段階において，選択を決定する factor が全く異なる。最も大きなちがいは，フランス語（英語も同様）で代名詞で表現することを，日本語では別の動詞で表現する（ヤル *vs* クレル）。と同時に，その動詞自体がすでに何らかの敬意（この場合は謙譲）の存在を含んでいること，また最終段階にたどりつく前に，日本語では主語がどの人称であれ，その主語（すなわち動作主）に対する敬意の有無の決定をしなければならない。そして最も終りの時点で，当面の会話の相手である聞き手への敬意の有無を決定しなければならない。すなわち，日本語の動詞がある context の中で有効な動詞表現として表出されるまでには，敬意の有無を各段階で決定しなければならない。これは西欧語の人称・数に匹敵する重要な文法項目である。

また日本語では，表出される形態が複数あることがあるが，そのうちのどれを選ぶかは話し手の好みにまかされており，それこそスタイルの問題である。西欧語でいうスタイルはおそらく，日本語のこの動詞表現が最終的に決定された後の選択に当ると思われる。

以上，表１～３，及び図１～２で示したように，日本語の敬語に一対一で対応する語は西欧語には無く，むしろ彼らの人称・数に対応するといってもよい。ただ，なぜある言語は敬意の有無を重要視し，ある言語は人称・数を重要視するかは不明である。このことは大変興味深いテーマであるが，それを論ずるのは本論の主旨ではないので，ただこの事実を指摘するにとどめる。

2. 形態素による二項分析

前節までで，日本語の動詞の変化は西欧語と異なり，その動作に関与している人間に対する敬意の有無によって左右されることがわかった。それならば，この敬意の有無ということを一つの文法事項として立てて，それを動詞決定の条件としたらどうであろうか。

今仮りに，聞き手に対する敬意の有無を，デス・マス（des, mas という形態素）の存在によって知ることができるとして，これらのいずれか（活用形を含む）が動詞に付加されている場合に，その動詞を〈＋ｈ〉，いずれも付加されていない場合を〈－ｈ〉という記号で表わすことにしよう。

次に，動作主に対する敬意の有無は，助動詞のレル・ラレル（動詞の終止形のｕ→ａ，次に形態素 reru），あるいはオ～ニナル（子音動詞の終止形のｕ→ｉ，母音動詞の終止形の ru→ϕ，次にその前後にｏ～ninaru）の存在によって，または別のいいかえの変異形（マイル，イラッシャル）の存在によって知ることができるとして，これらのいずれかがある場合は，その動詞を

〈＋H〉，いずれも持たない場合は〈－H〉という記号で表わすことにしよう。[8]

すると表1の各表現は，イク〈－H，－h〉，イキマス〈－H，＋h〉，マイリマス〈＋H，＋h〉，イカレル，イラッシャル，オイデニナル〈＋H，－h〉，イカレマス，イラッシャイマス，オイデニナリマス〈＋H，＋h〉と表記することができる。

表2の各表現は，ヤル，モラウ，クレルが〈－H，－h〉であるだけで，他はすべて〈＋H，－h〉となる。表2には入れてないが，これらにデス，マスの付いた，ヤリマス・ヤルンデス，モライマス・モラウンデス，クレマス・クレルンデスは〈－H，＋h〉となり，その他の表現は，サシアゲマス・サシアゲルンデス等となって〈＋H，＋h〉と表記することができる。

このような表現をするメリットとしては，次の二つが考えられる。一つは，誰に対する敬意はどこに表わすかを明らかに示すこと，一つは，ある発話が丁寧かどうかを判断する客観的な根拠を与えることである。従って前者の点では，外国人が日本語を学習する時の敬語習得の助けになるであろうし，後者はこれから本稿で述べるような，談話の分析に利用することができる。すなわち，談話中に使われたすべての動詞を，この〈±H，±h〉の四種の組み合わせによって分類して，その各々の出現率を比較すれば，複数の話者の丁寧さの度合とか，複数の場面での同一話者の丁寧度のちがいとか，また，同一場面での異なった話題による談話の丁寧さのレベルの差とか，を知ることができる。また同時に，そのような分析方法をとることによって，外国語との比較も今よりはやりやすくなる。

しかもこの二項分析法は，敬意の形態素の存在という，動かすことのできない事実を基にして測るのであるから，たとえば英語等で第三者に文全体の感じを判断させるやり方よりは，はるかに客観的で正確である。ただ，この方法が本当に我々生得話者の本能的判断に一致するかどうかは，いくつかの実際のデータに当ってみなければ証明できない。

そこで次章では，アンケート調査の回答票と，実際の会話とを資料として，上の二項分析による分析を行なった結果を示す。

III　資料による検証

1.　アンケート調査の回答票の分析

1982年から84年まで，文部省科学研究費による特定研究「情報化社会における言語の標準化」の中の一研究として，井出班（のちに渡辺班）では言語の意識調査を行なった。対象は東京近郊に住む大学生の両親で男女合せて527名の回答を得た。この調査の方法及びくわしい報告は井出他著の「女性の敬語の機能と分析」(1985) に書いたので参照していただきたい。

調査項目は四つあったが，そのうちの一つ，誰にどのような言語形式を使うかを尋ねた項目への回答を本稿の資料とする。この質問は，日頃よく接触する人物を，気楽な態度で接する人物か

表4　相手の人物による動詞表現の使いわけ

	男				性			
	妻	子　供	友　人	近所の人	子供の先生	職場の部下	職場の同僚	職場の上司
＜－H，　－h＞	98.16%	99.56%	65.57%	3.39%	0　%	80.60%	46.97%	1.65%
＜＋H，　－h＞	1.23	0.44	5.74	0	0	0.50	3.03	0.83
＜－H，　＋h＞	0.61	0	21.31	25.42	4.76	16.42	40.15	7.02
＜＋H，　＋h＞	0	0	7.38	71.19	95.24	2.49	9.85	90.50
N＝	163	229	122	59	63	201	132	242
	女				性			
	夫	子　供	友　人	近所の人	子供の先生	配達人	趣味の先生	夫の上司
＜－H，　－h＞	61.11%	99.65%	26.92%	7.81%	0.57%	31.25%	0　%	0.64%
＜＋H，　－h＞	10.49	0	46.15	27.34	1.14	21.25	0.88	0
＜－H，　＋h＞	22.22	0.35	10.44	15.63	0.57	36.25	0.88	0
＜＋H，　＋h＞	6.17	0	16.48	49.22	97.71	11.25	98.23	99.36
N＝	162	289	182	128	175	80	113	156

ら，あらたまった態度で接する人物まで，五段階にわたるように挙げてもらい，それぞれの人物に「イツイクカ」という質問をする時にはどのような表現を使うかを尋ねたものである。

「イツイクカ」というのは，相手の行為を尋ねているので，当然，動詞の主語はイク動作を行う人，つまりこの調査項目では，回答者が気楽に，あるいはあらたまった態度で接するいろいろの人物であるということになる。従ってこれらの各人物に対して使うと答えられた言語形式は，回答者の各人物に対する態度を反映すると同時に，その態度を表現するもっとも適切な表現として捉えられている，と見ることができる。

全回答票からは，84の異なった表現が集められたが，そのうち回答数が5以下のものを省いて，27を分析の対象とした。それを前述の〈±H，±h〉の二項分析で分類したところ，表4のような価が得られた。

表4を見ると，相手が子供の時には何の敬意も示さない〈－H，－h〉形，すなわち，イク，イクノ，イクンダ等がほぼ100％を占めていることがわかる。また夫が妻に向って質問する時にも，この〈－H，－h〉がほぼ100％使われるが，妻が夫に質問する時は，〈－H，－h〉は61.11％の率でしか使われず，この他にイキマスカ，イクンデスカ等の〈－H，＋h〉が22.22％，イラッシャル，イラッシャルノ等の〈＋H，－h〉が10.49％の率で現われているのは興味深い。

これらとは逆に，相手を動作主としても聞き手としても，共に敬意を表わす〈＋H，＋h〉は，子供や妻には0％で，子供の先生とか，職場の上司，夫の上司，趣味の先生等，何らかの意味で，回答者より上に位置づけられる人物に対して90～100％に近い高い率で現われている。

この他にも，職場の同僚には〈－H，－h〉と〈－H，＋h〉がほぼ同率で使われるとか，友人に対しては男性は〈－H，－h〉を好み，女性は〈＋H，－h〉を好むという男女差も伺われる。

このように見てみると，わずかイクという動詞一つをとって調べてみても，話し手（この場合回答者）と聞き手（相手の人物）との間の関係が，見事といっていいほどはっきりと言語形式に反映されていることがわかる。前にこの調査の報告書を書いた時には，まだこの二項分析の方法に気がつかなくて，個々の言語形式を一つ一つ別に扱っていたので，すっきりとした形に分析できなかった。その後いろいろ試行錯誤を繰り返して，1986年の *Journal of Pragmatics* に，はじめてこの方法で分析したものを書いた。表4はその中の一部を取り出したものである。

この方法で各表現を分析しなおすと，個々の回答者は27にもわたるさまざまの言語形式を記入しているにもかかわらず，その全体としての言語行動のパターンが見えてくる。そしてその結果が，我々日本語を母語とする者の言語感覚に逆らうものではない。ということは，一見荒っぽく見えるこのような分析方法，すなわち動詞をすべて二分割し，そこに敬意を表わす形態素があるかないかで，四つのグループに分けることが，複雑な日本語の敬語の根幹に意外に触れているのではないかと思われる。

仮説ではあるが，日本人の頭の中には，言語知識（いわゆる competence）として，人間関係を表わす要素が組み込まれているのではないか，そしてそれは敬意の形態素として表出されるのではないかと思われる。前に図１，図２で示したように，西欧語で人称・数を経て言語形式に到達する過程を，日本語では動作主，被動作主への敬意を表わすか否かの判断を経て言語形式に到達する。ということは，西欧人が人称・数を表わす形態素を動詞に付加する方法を言語知識の一部として持っているのと同様に，日本人は敬意の形態素を動詞に付加する方法を言語知識の一部として持っているといってもよいのではないか。

このようにいうと，おそらく次のような反論が予想される。すなわち，西欧語の人称・数は西欧人は大した努力もなしに習得するのに，日本語の敬語は日本人でもかなり努力して学ばねばならない。同列には扱えないのではないか。

それに対しては言語習得過程と使用頻度という二つの点から答えられよう。すなわち，主語と動詞の人称・数での一致は，西欧人の子供にとっても難しいもので，徐々に習得して行くものである。一見大した努力もなしに身についたように見えるのは，主語と動詞の一致という問題はあらゆる文に生じるので，子供はそれを聞く点でも使う点でも十分な回数を経ているからである。が，敬意を表わすか否かという問題は単独の文中，単独の人間関係では生じない。つまり，敬意を表わす場合と表わさない場合とが対立的に生じて，はじめてその表現の差が習得されるのである。従って，非常に単純な人間関係しか持たない者，敬意を表わす必要のない場面しか経験しなかった者は，たとえ日本人でも，敬語知識は言語知識の一部となり得ない。それは敬語使用という状況に関しては，常に聾者であった，あるいは言語社会の中にいなかったのと同様の状態であると考えられる。従ってそのような状況に置かれた者が敬語を自分の言語知識とするためには，人間関係と言語形式，特に本稿で述べたような敬意の形態素の種類とそれらを付ける箇所を正確に学ばなければならない。それはちょうど我々が，英語の動詞の語尾にｓをつけるのはいつかを憶えなければならないのと同様である。

以上，アンケート調査の回答票の分析から得た結果を述べた。が，これは意識調査なので，もしかすると回答者の敬語知識を調べたにすぎないとの批判があるかもしれない。そこで，次に，実際の会話の中で使われた動詞を同じ方法で分析することにしよう。

2.　日常会話の分析

ここで使う資料は，前節のアンケートと同様，文部省科研費による特定研究の中で行なった。この調査方法及びデータは，井出他著「主婦の一週間の談話資料：本文及び解説篇」（1984）にまとめてある。

文字化した七つの場面のうち，本稿では三場面のみを取り上げる。それらは，この資料の主たる話し手である主婦Ｋが，もっともあらたまった態度で接するとした相手との会話，もっとも気

楽に接するとした相手との会話，及びその中間あたりの相手との会話の３つの場面である。この３つの場面それぞれにおいて，Ｋの使用する動詞にどのようなちがいがあるかを示したのが表５である。

表５の中で，201，602，701というのは場面コードで，この順にあらたまりの度合が低くなる。Ｋは201でもっともあらたまっていて，701でもっとも気楽にしているといってよい。

使用された動詞を〈±Ｈ，±ｈ〉で分類してみると，このＫの態度がよく反映されていることがわかる。すなわち，もっともあらたまった相手と話している201では〈＋Ｈ，＋ｈ〉がもっとも高い率で使われ，もっとも気楽な相手と話している701では〈－Ｈ，－ｈ〉がもっとも高い率で使われていて，逆に〈＋Ｈ，＋ｈ〉は無いに等しい。中間点の602ではいろいろな形が混在していて，ちょうど表４の同僚とか配達人とかの場合と似ている。

表５　あらたまりの異なる場面での動詞表現の使いわけ

	201	602	701
＜－Ｈ，－ｈ＞	18.2　％	38.0　％	72.0　％
＜＋Ｈ，－ｈ＞	4.2	15.5	10.0
＜－Ｈ，＋ｈ＞	34.9	42.9	17.5
＜＋Ｈ，＋ｈ＞	42.7	3.6	0.5
Ｎ＝	625	550	211

表５を〈±ｈ〉で更に再分類してみると，場面の差はより明瞭になる。動詞にデス・マスを付ける〈＋ｈ〉形は，201では77.6％にもなるのに，701では18％しかない。逆にデス・マスを付けない〈－ｈ〉形は701で82％，201で22.4％と，ちょうど相対応する値となっている。〈＋ｈ〉が701で18％もあるのは，家族間でもきまり文句は〈＋ｈ〉が多いこと，夫にはかなり〈＋ｈ〉を使っていることがその理由である。〈－ｈ〉が201で22.4％もあるのは，埋めこみ文の中ではデス・マスを省くことが多いというのがその理由である。

最後に，中間的な表現の多かった602を話題別に小場面に分けて再分析してみよう（表６）。この602というのは，Ｋが料理教室で若い女性に料理を教えている場面で，その進行状況によって話題が変わる。まずⅠは，料理の準備をしているところで，Ｋは生徒と雑談しながら指示を与えている。Ⅱは，Ｋが料理方法を説明しているところで，ほとんど一人でしゃべっている。Ⅲは，料理の最中で，雑談はほとんどなく，料理そのものに関する会話が主である。Ⅳは，料理が終って試食しているところで，話題はもっぱら，身辺雑事，ファッション，食物，健康に関するもので，前の三つとはかなり異なる。

表６ではすべての動詞の〈±ｈ〉を判定し，次にデス・マスを付加することができる箇所に付加してないものを〈－ｈ〉として加えた。例えば次のようなものがそれである。

カイシャノ　オヤスミ？

オオサジ　ニハイ

モウスコシ　オオメニシテオイテイイワ

従って表のNの総数は表5の602のNよりも多くなっている。

表6　話題による動詞表現の使いわけ

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
＜＋h＞	33.3　%	76.6　%	41.9　%	27.0　%
＜－h＞	66.7	23.4	58.1	73.0
N＝	213	111	341	241

表6の〈＋h〉と〈－h〉の比率を話題別に比べてみると，〈＋h〉がⅡで76.6%，〈－h〉がⅣで73%と，ちょうど逆の関係になっている。Ⅱは，Kが料理法を説明しているところで，いわば講義のようなものである。このような時には相手は同じでもことば使いは全くちがって，非常にformalなものとなる。

Ⅳは，料理終了後に試食しながら雑談をしているところで，ここでは〈＋h〉と〈－h〉の比がⅡと逆転する。それぞれの場面でのKの発話の例を挙げてみよう。

Ⅱ　キョウハ　チューゴクリョーリデスネ

ツヨビデ　ネリアゲテ　イタダキマス

タケグシガ　スットササルグライニナリマシタラバ…

Ⅳ　アレナンナノ　アソコ

ドノクライ　タンシュクデキルノ

ウン　ダイジョウブ

すなわち，相手も場所も全く同じでも，話題とか場面が変わることによって，使用言語は全く変わることが，表6で証明された。いわばこの小場面Ⅱは表5の201を，小場面Ⅳは701を再現しているといってよい。また，201は表4の上司，先生等と，701は配偶者・子供等と，同じ丁寧度であるといってよかろう。

このようにしてみると，意識調査で非常に鮮明な形で出たことが，実際の会話でもほぼ同じ形で現われることがわかった。いずれの場合にも，敬意の形態素を付加するか否かということは，相手，場面，話題に対応した言語表現を表出するためのキイ・ポイントになっているといえるであろう。また逆に，その形態素の有無を調べることによって，相手，場面，話題に対する話し手の態度を知ることもできる。

Ⅳ　ま　と　め

以上，二つの資料に現われた動詞表現を，二項分析で分析した結果，敬意の形態素の有無のみによって，話し手のあらたまりの程度，丁寧さの度合を，驚くほど正確に測ることができることがわかった。一人の人間の複数の発話，複数の人間の発話，異なった場面での発話等々，あらゆる状況で発せられた発話の丁寧度を比較する時に，この二項分析は簡単で有効な方法となるであろう。

このことがもっと多くの調査や実験で証明されるならば，敬意の有無ということを，日本語の文法事項の一つに組み込み，西欧語と異なる構成を持つ要因の一つに設定することができるであろう。それはひいては人間の言語に対して今我々が持っている概念を，より一層深く豊かなものにする第一歩ともなるであろう。

（注）

(1)　本研究は昭和61～63年度文部省科学研究費による一般研究Ｃ「社会適応のための対人関係調節機構として捉えた言語行動」の一部である。

(2)　英文で発表されたものには，参考文献の④，⑥，⑩，⑯，⑰などがあり，日本語で発表されたものには，③，⑤，⑧，⑨，⑬などがある。これらはいずれも社会言語学的視野から書かれている。

(3)　Brown and Levinson (1978) の中で詳述されているが，もともとは社会心理学者の間で，人間関係を規定する重要な要素として face という概念を立てたことに基因する。この概念は日本語でも英語でも全く同じように使われる。顔を立てる＝save face, 顔をつぶす＝lose face など。

(4)　*IJSL* の27号は，politeness と deference の特集であるが，そこに掲載されている論文はすべて何らかのＦＴＡ，つまり相手の領域を侵すような行為，依頼，指示，謝罪等をする時の言語表現を調べている。これに反して日本人研究者の敬語研究は，そのような枠を必要としない。この日英両言語の敬意表現の前提のちがいにぶつかって，何度も調査をやり直したいきさつが井出他著「日本人とアメリカ人の敬語行動」(1986) に述べられている。

(5)　堀素子「待遇意識を反映する言語形式」(1985) に，このデス・マスが丁寧かどうかについて論じている。Ikuta (1983) にも。

(6)　西欧語の人称と日本語の敬語との対応は，ロドリゲス，コリヤード等外国人によって指摘されているが，それはいわゆる美称と所有代名詞の対応である。またチエンバレンは人称と動詞との関連に触れているが，それは一人称と謙譲，二人称・三人称と尊敬の表現が対応すると述べている。が，いずれも人称・数を表わす形態素と，敬意の形態素を並べるという考えはない。

(7)　授受動詞では物の移動の方向が問題であることは，奥津「動詞文型の比較」(1980) に指摘がある。

(8)　このように動詞を二分する方法は，Harada (1976) もしている。ただし名称は〈±H〉を propositional honorifics,〈±h〉を performative honorifics としている。また偶然にも，宮地弘明氏（明治大学大学院）が，本稿発表の直前の発表でH, h, ϕ の記号を使って，素材待遇語，丁寧語の使用の有無を表記している（昭和63年春季大会要旨71ページ）。

(9)　本稿は，国語学会昭和63年春季大会（63年５月22日，於明治大学）において発表したものに修正加筆したものである。

参考文献

① Brown, Penelope and Stephen Levinson (1978). Universals in language usage: politeness phenomena. In E.N. Goody (ed.), *Questions and Politeness: Strategies in Social Interaction.* Cambridge: Cambridge University Press.

② Harada, S.I.(1976) Honorifics. In Shibatani (ed.), *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar.* New York: Academic Press. 499-561.

③ 堀　素子（1985）「待遇意識を反映する言語形式――デス・マスは丁寧ですか――」『城西大学女子短期大学部紀要』Vol.2, No.1.

④ Hori, Motoko.(1986) A sociolinguistic analysis of the Japanese honorifics. *Journal of Pragmatics* 10：373-386.

⑤ 堀　素子（1988）『日本語の敬意表現――英語との比較――』城西大学学術叢書.

⑥ Ide, Sachiko (1982). Japanese sociolinguistics: politeness and women's language. *Lingua.* 57：357-385.

⑦ 井出祥子，生田少子，川崎晶子，堀素子，芳賀日登美共編（1984）『主婦の一週間の談話資料』文部省科学研究費刊行物.

⑧ 井出祥子，堀素子，川崎晶子，生田少子，芳賀日登美共著（1985）『女性の敬語の言語形式と機能』文部省科学研究費研究成果報告書.

⑨ 井出祥子，萩野綱男，川崎晶子，生田少子共著（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動――大学生の場合――』東京：南雲堂.

⑩ Ikuta, Shoko (1983). Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Sciences* Vol.5, No.1. 37-53.

⑪ 北原保雄編（1978）『論集日本語研究 9 敬語』東京：有精堂.

⑫ 国広哲弥編（1980）『日英比較講座第 2 巻文法』東京：大修館.

⑬ 南不二男（1987）『敬語』岩波新書.

⑭ 奥津敬一郎（1980）「動詞文型の比較」国広哲弥編『日英比較講座第 2 巻文法』63-100.

⑮ 大杉邦三（1982）『英語の敬意表現』東京：大修館.

⑯ Peng, Fred C.C.(1973). *La Parole* of Japanese pronouns. *Language Sciences* April：36-39.

⑰ Peng, Fred C.C.(1974). Communicative distance. *Language Sciences* August：32-40.

⑱ 鈴木一彦，林巨樹編（1984）『研究資料日本文法 9　敬語法編』東京：明治書院.

⑲ 辻村敏樹，春日和男，森野宗明，桜井光昭，小松寿雄，宮地裕共著（1971）『講座国語史 5　敬語史』東京：大修館.

⑳ Walters, Joel, Issue Editor.(1981) The Sociolinguistics of Deference and Politeness. *International Journal of Sociology of Language.* 27.